

天理大神は私のやうな悪人の命をも助けて下
された、況してお前方のやうな善い人にはど
れほどの恩恵を興へて下さるかも知れぬ、誠
を以て神を信仰さつしやれ、神を信じて安心
立命を得さつしやれ

と云ふ

檀造のこの布教は、忽ちに功を奏して、十人が二十人、二十人が
五十人、百人千人萬人と信徒が増ねて、遂に郡山分教會を設立する
に至つた、彼は斯く改心しても、乾兒の中には改心せぬものがある
るれ等の者が無法の無心を吹きかけて來ることあつても

檀造は一言も逆はなんだ、無心を云はるれば
金を出さず、金の無い時は家財を賣る、或る時
は敷いて居る畳を賣つて、舊の乾兒に恵み遣
した事もあるさうである

さしもの大博徒も、遂に美伎子に感化されて、後には幾萬人の信
徒に、活神同様に尊敬せられ、數年前に大往生を遂げたこの事であ
る

これは眞の一例、美伎子の感化力の偉大であることを証據立てる
爲めに披露したのである

教へはいかに高遠でも、人を化する力がなけ

れば何んにもならぬ、教へはいかに卑近でも人を化するに廣く且つ深ければ、宗教家としての能事は之れで足る

この点から云つても、美伎子は全くエライのである

(二十五)

「てんりわうのみこと」といふと、人は直に

金米糖を聯想する

「てんりわう」の金米糖は耶穌教の赤葡萄酒、佛教の蓮華の菓子にも比ぶる

金米糖と「てんりわうのみこと」

そもくこれに何の關係があるであらう

(108)

僕はこれ聞いて見なくなつた、第一に傳兵衛さんに尋ねたが知らぬといふ、他の信者にも聞いて見たが知らぬといふ、由て去年大祭を見に行つた時、美伎子の門人にそれ聞いて見たが、いかさま「てんりわう」と金米糖とは免れ難い因縁がある

金米糖は美伎子が一番の好物であつたさうだ
美伎子は老後宛然小供のやうな氣になつて、
小供の好く金米糖を唯一の美味と賞玩したさうだ

のみならず、手に觸れる物、耳に聞く物、總てを布教の材料にした彼女は

金米糖を以て布教を助けたさうで、彼女の側

(109)

には必ず多くの金米糖が三寶に載せて置いて
あつたさうである

ろこで美伎子の云ふ處が面白い、例の八埃をたんと持つて居さう
な信者や、祈禱を頼みに來るものがある

まづ金米糖を一粒摘む

「さこれを見さつしやれ、これは何處の菓子
屋にも賣つて居る菓子の金米糖ぢやが、この
通りにゴツくこの角がある、一寸見ると、色
の白い鬼見たやうぢやが、この角を一つく
に脱て了ふと、後は圓う甘い物になる」

(200)

人間もこの通りぢや、お前方は心に色々の埃があるから、神様の
お目で御覽になると恰どこの金米糖のやうに角だらけの鬼に見ゆる
人間で居ながら神様のお目に鬼と見られる、こんな悲しいことは無
いぢやないか

金米糖もこのやうに角があるから、角の間に
塵埃が積る、人間も罪惡や禍害が澤山あると
自然に塵埃が積つて來るから、それが病氣の
根本になる、早う角を取らつしやれ、圓い美
しい人間にならつしやれ、すれば自然に苦痛
苦患が免れられる

(201)

例の飾り氣の無い、底力のある聲で斯う云つての金米糖を信者に與へ、更に自分も口へ入れる、これが彼女の普通手段であつて

罪惡の多くあるらしい信者には、今のやうに云つて金米糖を興へ、段々信仰が増して來ると、彼の供物の洗米を興へるやうにした、それで信者は早く洗米の方を貰はうと思つて、專念に信仰する、專念の信仰は即ち徳を修むる所以である、惡さを拂ふ所以である

「てんりわうのみこと」が金米糖を大切にすることは要りこれに因るのである

美伎子が死んで後も、彼女の説いた道は残る、彼女の好いた金米糖は残る

そこで金米糖を布教の道具にした

始めは各分教會支教會等へ本部から金米糖を支給して居た爲め、三嶋の本部は金米糖の間屋然とした概もあつた、處が誰云ふと無く

金米糖にはモルヒネが混加つて居るとの風説が行はれた

「てんりわう」が金米糖を病人に與へるのは、モルヒネの効驗に待つ所があるのである、斯る激藥を素人の手に扱ふのは、甚しく危険である「てんりわう」は不埒だ「てんりわう」は社會の賊だと四方八方から抗撃する

中にはろの金米糖を分析したのもあつたが

粟の實一つ心に入つて居るばかりで、他に
何んの故障もない

最も粟は阿片の原料であるから、モルヒネに關係の無いことは
ないが、粟の實一つが人体に害を及ぼす筈はない、殊にそれは「
てんり」式金米糖のみでなく

何の金米糖にも粟の實が心になつて居ない
ものは無い

けれど尙人々の誤解を避ける爲めに、各地の教會られ自身が、近
所の駄菓子屋で買ひ求めることにしたが、それでも世間の抗撃は止
まぬ

菓子屋の金米糖も一たび「てんりわう」の手
を経るこ、その中にモルヒネが混加される如
くにいふ

ろこで「てんりわう」も我を折つて、教祖の御好物ではあるが、
この金米糖の爲めに、布教を妨げることあつては恐縮奉る、以來金
米糖とは手を切らうといふので、明治二十七年以來、金米糖を用ゆ
ることを、全然お廢止にしたさうである

然し古い信者は今も尙金米糖を有難がつて供物に用ゆるものがあ
る、お下りは邪氣を拂ふ効があると云つて、舌の頭で角を脱るもの
もある

金米糖と「てんりわう」何んと面白い對照ではあるまいか

天理教には管長がある、管長は美伎子の血統を以て世襲し、内務大臣の許可を得て就職する

爾うしてその権能は無限である

然しその管長も一面に於て教師で、教師は一級から十四級まである、ちよつと面倒だが披露しやう

- 大教正(一級) 權大教正(二級) 中教正(三級) 權中教正(四級)
- 少教正(五級) 權少教正(六級) 大講義(七級) 權大講義(八級)
- 中講義(九級) 權中講義(十級) 少講義(十一級) 權少講義(十二級)
- 訓導(十三級) 權訓導(十四級)

ざつと斯うである、ろこでこの教師の数がどれほどあるかといふと、無慮三萬三千餘人以上であるといふ「てんりわうのみこと」多

士濟々といふべきである

然し中には、何んだ「てんりわう」の教師、高が百姓か顔役の成上りだらう、と仰せらるゝ向もあらうが、昔は知らず今は中々さうでない、教師任用分限規程といふもので、その資格が定められてある、即ち左の通り

- 一 天理教の卒業證書を有する者
- 二 滿三年以上本教々師の任にありし者
- 三 神道本局教師の任に在る者、及滿三年以上其任にありし者
- 四 神道皇學館の卒業證書を有する者
- 五 皇典講究所に於て内務大臣の認可を得て定めたる規則に依り學階學正を付與せられたる者
- 六 中學校以上の卒業證書を有する者

これならまづ立派なものぢやないか、十数年前の「てんりわう」がこれまでに發達進歩したかと思ふと、實以て驚かざるを得ないではないか

最も多くの教師の中には、不都合なものが無いとも云はれぬ、美伎子の徳を傷けるものが無いとも云はれぬ、今の時には懲戒免職をする、又別の情狀及び教廳教務の都合によつて、休職を命ずる場合もあるさうぢや

これが天理教の教師淘汰法である、獨立宣言と同時に、この處分法に由つて淘汰せられたもの、ざつと二千人ほどあつたといふから、以後は布教その他に多少の改善を見るであら

うこの説がある

今までは本部の下に分教會、分教會の下に支教會、支教會の下に出張所布教所等の差別があつたが、今度規則を改正して

- (一) 大教會
- (二) 教會
- (三) 分教會
- (四) 支教會
- (五) 宣教所

と改正をして

大教會は信徒一萬戸以上を有するもの、教會は同じく五千戸以上を有するもの、分教會は二千戸以上、支教會は五百戸以上、宣教所は一百戸以上を有する者

とした、南無阿彌陀佛を唱へる者が、直ちに佛教信徒である如く「悪きを排ふて助けたまへ、てんりわうのみこと」を口にする者は悉く信者かといふと爾うでない

(210)

信者には教費を助くる義務がある

この義務をいくらかといふと

一人につき一ヶ月貳錢以上貳拾錢以下と規定してある

その中五厘を本部へ納める

これが廟費となり布教費となり教育費となり土工費となり、遂に立派な宗教となつたのである

こんなに内分が整頓して、こんなに立派な規程や教典まで出来て

居るのに

是まで何故日蔭に居たか「てんりわう」こいふと何故人々に輕侮されて居たか

これが研究問題である

僕は思ふ

天理教が文字の教でなく、口舌の教へであつたこと、世の誤解を招いた原因である、その信者門人が多く百姓、商人、職工、労働者の類で、まづ卑近な事から頭に入れ、それを人々に吹聴した事、世の誤解を招いた原因であ

(211)

る、布教の方法に公開演説や辻説法をしない
で、個人傳道のみを遣て居ること、世の誤解
を招いた原因である、美伎子の確信からでは
あるが、祈禱咒咀で疾病を癒し、若しくは癒
さうとした事、これが世の誤解を招く原因で
ある

もし美伎子の門人に、學問智識の卓越した人があつて、美伎子の
行狀、美伎子の人格、美伎子の奇蹟、美伎子の言語等を詳しく文字
に書き記し、早く世間に發表して置いたら、もう少し早くの眞價
を認められて居たかも知れない

美伎子が無學の婆さんであつたことは、天理
教の價を上下する問題とならぬ、信者の多數
が比較的無學の人であることも、又天理教の
價を上下する問題とはならぬ

只僕は天理教が是まで日隆にあつたのを惜しく思ふ、天理教の教
師某は去年の大祭に、僕を捉へて斯う語つた

「いかにも教祖は田舎の一老婆で、智識學問は修めて居られなか
つた、けれど神明の信用を得て天理教建立の大任を授けらるべき精
神資格は十分に備へて居られた、凡そ一宗一道を開くには、
それに必要な宗教的天才、大信仰、大慈

悲の三條を具備すること、世の中の所謂智識
や學問などは、餘り問ふ必要はあるまいと信じ
ます、教祖はおのれの至誠に由て、神から立教の
大任を授けられたのであるから、至誠止み難く
熱烈の心を以て、天理大神を尊信敬
仰する人々に道を授けられたので、それが百
姓か勞働者か、乃至は官吏か會社員か、一々
ろんなことをお調べなされたものではなく、
又身分の高下を問ふ必要もなかつたのである、
譬へばクリストの使徒の多くが、始めはガ
リヤの漁夫であつたにも拘はらず、その教
へは遂に世界の上下を一貫して傳つて居るの
でも知られる、天理教は根本が救済教である
から、貴賤上下の差別はない、一体平等に人
を救済するのが本領である、天理教は謂ゆる
言擧せぬ教

へて、筆舌を主とせず、實行を主とする、天理教
の教師は他の宗教の傳道者の如く、大獅子吼を遣つて居ない、又遣
らうとも豫期して居ない、それはおのれの信仰を行為で見せて、正
實に他を誘ひ導くので、つまりが人ごとに説き、戸ごとに訓へる、
それで止むを得ず個人傳道をするこゝになるが、
然し實踐躬行、濟世救人の本領には、この法が
協つて居るであらうと信ずる、故に天理教の教師は、
學問よりも信仰を重んずる、智識よりは正直を重んずる、と云つて
學問智識を疎略にする理ではない、信仰は根本で、學問智識はそれ
を培ふ肥料であるから、中學校を建て、教校を開いて盛んに人材の
養成に力める、學問があつて信仰の無いのは、天理教の門外漢で、

天理教の人ではない、我々教師は學問智識を裏面に包んで、表に信仰の貴むべきことを語る、これが教祖の主義である、これが我教の本分である」

(216)

いかにも意氣軒昂たる様である、それからほつと一息ついて

「序に疾病を癒すべく祈禱することを申し上げ、天理教は

精神界の大革新、人心の改造を以て大目的とす

る、然も疾病の本は心であり、その多くは心で病を作るのであるから、我々は心の心を助ける、神の助けに由つて心が改まる、心が改まれば罪惡が免れる、禍害の根が絶たれる、すれば疾病は自ら全快する、のみならず將來に發生るべき疾病の發生らずに終る筈であるもし天理教が醫であるならば、それは疾病を癒くするの

ではなくて、心を癒くするのである、天理教は人間の

救済を本領とする、救済を本領とする天理教が、疾病を禍害の第

一として、その平癒快復に重きを置くは當然の理ではあるまいか、

あなたは何んとお思ひなさる」

教師の語つた大要は斯うである、所以を聞けば有難い、何れの方面から云つても

天理教は我々の研究すべき一大塊である

これを要するに、日本の宗教は多く中流を中心として、上下兩方に少しつと枝を伸ばして居る、然し、罪惡を犯す者、禍害を作る者これは下層の人間に多い、美伎子がうこへ眼を付けて、平坦に眞直な道を作り、隣から隣へ一跨げにどんな愚夫愚婦でも越えられるや

(217)

うにして、備でも佛でも度し難いとして居る

下層の群へ手を伸ばして、専心に人心改造の
大仕事を思ひ立つた

のは面白い、うれは恰ごと

俄にた人の間へ焼芋を投げて遣つたやうなも
ので

多くの人心は翕然としてこれに向ふ、そこで死後三十年も経たぬ
中に、已に海内十分一の人心を支配し、更に海外に布教の手を着け
やうとして居る、「てんりわう」の道を聞かぬ人々は、食す嫌ひに
冷罵する、冷罵するばかりで、研究しやうとするものがない、どん
な物でも研究する中には興味が湧く

これ僕がこの一大塊に向つて研究の手を付け
た所以である

明治四十二年一月二十七日印刷
明治四十二年二月一日發行

正價金七拾錢

郵稅金拾錢

著者 渡邊 勝
大阪市東區唐居町百五十七番地

發行者 武田 彌富久
大阪市南區問屋町五十五番屋敷

印刷者 濱田 正夫
大阪市南區安堂寺橋西詰南へ入

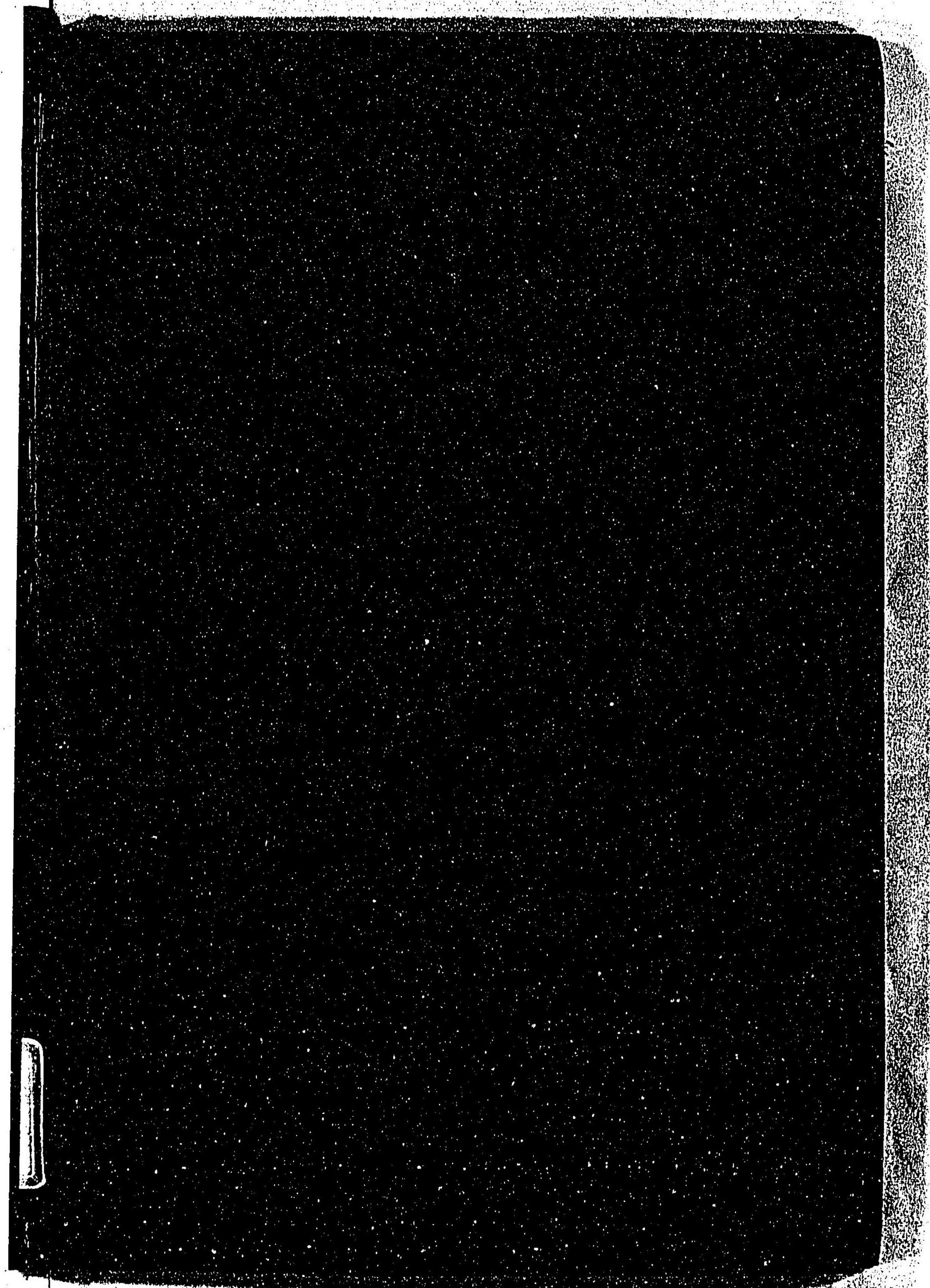
印刷所 濱田日報社
大阪市南區問屋町五十五番屋敷

發行所

育文館



324
113



324
113

014446-000-3

324-113

天理教側面觀

渡辺 霞亭(碧瑠璃園) / 著

M42

ABB-0824



